素描

私の教育論

村橋 俊介*

人間は過去に幾たびか転機を察知し、反省し、修正し将来に希望をつないできたと思う。あと1/4世紀で21世紀を迎えようとしている。諸情勢はいま大きな転機にあることを伝えている。

すでに二つの大戦を経験してきた。人間は賢明となり、著しく進んだ科学、技術の進歩の中で、豊かで平和に暮せるはずなのに、ことはすべて裏目にでて、混乱の中に資源、人口、エネルギーの諸問題をかかえて見通しを立てかねている。知性の不足なのか、知識の不足なのか大いに考えさせられる。“地球が一つの船だというのはその通りだ、だが私たちはいつも船底でオール漕ぎをやらされてきた”このような不満をもらす人々が世界に沢山いることを認識せねばならない。

今やわれわれの生存が世界の関連において成り立っていることを認識し、高度成長や、使い捨ての消費主義が誤っていたことに思ひいたさねばならない。

人間はどんな生き方をすべきなのか、生きて行くために必要なものは何か、分かち与えうるものは何かよく考えて行動すべきなのである。

昏迷の中に教育問題が窮極の課題として挙げられ、論ぜられるゆえんもそこにあるのであろう。知的資産とその集約（物とは限らない）がわれわれの与えうるただ一つのものであるならば、ふやし質を高める努力をせねばならない。われわれは戦後先進の知的資産を輸入した。幸いに巧みに消化することができ今日の経済と学問のポテンシャルをつくることができた。しかし自分自身の手で、とことん造り上げた所産でない点を考慮すべきである。

私はこの反省を今後の科学教育の出発点に置いてほしいと思う。模倣と追いつき追い越せる性急さの中に

創造性を尊重し評価する環境も十分育たなかったし育てる積極的努力も十分でなかったことを反省する必要がある。私は日本人が本来非創造性であるとはどうしても考えられない。

科学は元来、人類の知的資産を広げ、その応用の面で人類の福祉に貢献するはずであった。しかし運用面の“まずさ”は“つまずき”となり科学、技術に対する不信を生んだことは残念である。しかしこれからの科学、技術は Technology Assessment などにより誤ちを避けるとともに、むしろ人類の不測の困難を避けるための人類存続 Survival の科学ですらなければならないと思う。不足する資源の代替回収、環境汚染の防止、新しい理想の環境づくり、生活の糧、新エネルギーの開発などの諸問題は科学、技術の解決を待っている。一国の科学、技術の発展の源泉は専門基礎の諸分野の研究活動に源を発している。このことに対する国の認識は依然として低い。転機に際して、国は反省し積極的な展望を持つべきであろう。

高分子科学の教育のこと：H. Staudinger, G. Natta, K. Ziegler, P. J. Floryの(W. Carothersは若くして死去し残念であったが)高分子科学の基礎づくりに貢献した4名に次々とノーベル賞が与えられた。

高分子（巨大分子-Staudinger）の世の中における存在が学問的に裏付けられ、高分子の基礎分野の研究が出發した1930年頃を振りかえると、高分子の物性的理解において、生化学的理解において、合成高分子工業の成功において、その速やかな発展ぶりに驚かされる。この転機において創造性を最大の課題とした教育論を展開してほしいと思うし、またここでは視点を高分子の分野に置き、高校から大学教育、企業社会における教育と大学、生涯教育など方策と方法論が広く議論されることを期待したい。（50.1.20）

* Shunsuke MURAHASHI (593 大阪府堺市上野芝向ヶ丘町 1-777) 大阪大学名誉教授、本会名誉会員